

看護倫理の視点から患者の QOL と SOL を考える

～入院中の高齢患者への適切な排泄ケアを通して～

尾道市立市民病院

山田 佐登美

当院の入院患者の 37%は、後期高齢者である。医療技術の進歩に伴い、多疾患有病者でもある高齢者に対する積極的治療が可能となっている。その中で、治療中に以下に認知機能や運動機能を低下させずに住み慣れた在宅へ移行可能か、看護師は模索している。いくつかの実践を紹介し、看護倫理の視点を踏まえて患者、特に高齢患者の QOL/SOL について提言したい。

【実践例】

入院すると「転倒転落リスクアセスメント」を実施する。その結果、高齢者は運動能力や感覚器機能、認知機能が低下していることが多く、室内排泄（ポータブル）にする場合がある。また、治療上の安静によって一次的にオムツ装着を開始したはずが、長期化する事例もみられた。

「排泄は、基本的ニーズであり、かつ人とすての尊厳に関わる行為であること」、「排泄の自立・自律は、日常生活の自立・自律と直結すること」であることから排泄ケアは患者の QOL や SOL に大きな影響を与える。そのため、「排泄ケアは、日常的なケアでもあるが医療現場では、専門性の高いケアであること」、「医療現場における排泄ケアは、組織的に取り組むべきこと（継続性や質の保証、教育）」、「“患者のために”から“患者の立場で”と発想を転換すること」を考え、「トイレで排泄キャンペーン」を実施した。ポータブル便器を使用できる患者の ADL は、歩行可能或いは介助による歩行可能患者である場合や尿意もあり、排泄前後のケアも自分で可能な場合もある。そうであるならば「なぜ、トイレでの排泄が困難なのか？」と考えると「患者の安全のために」というナースの一つの価値観からであった。そこで、「患者の排泄パターン（量、時間、回数）を知ること」、「患者のもつ「力」正しくアセスメントすること」、「排泄ケアを他の看護ケア計画の中に織り込むこと」に取り組んだ。

その結果、患者側の成果として「ADL 拡大⇒リハ促進 ⇒離床の促進」、「認知機能の好転」、「尊厳の回復」あり、看護師側にも「離床の促進から在院日数の短縮」、「ポータブルトイレの管理が不要」、「感染管理」、「ベッド周辺にスペースができ作業がしやすい」、「脱臭・防臭剤が不要」等の成果があった。

今年は、トイレで排泄キャンペーンの第 2 弾として「オムツ改革」に取り組んでいる。まずは、可動域を制限しないように良質のオムツを正しく装着すること、更におしめからの離脱に積極的に関わっている。

このようにして排泄の自立を目標に実践することは、在宅療養のチャンスを拡大させ、看護師にとっても倫理的行動への意識を高める機会となった。